

機械作用と身體の個性（下）

大 西 友 太

一七

さて私は前數節に於て體內に於ける物質の變化は可能の自由に於て發生するものでなければならぬ點に於て、この變化を支配する植物性神經はこの自由の上に立つものでなければならぬ點について論じた。これによるときはこの神經の支配下に起るところの體內物質の變化はその根柢では何物をも介せざるそれ自身の内面的自覺によつて生ずるものであるから、それ自身では勿論意識せる精神作用でなければならぬのである。私は此回の論文でこの物の意識について攻究しようと思ふ。このことは實は既に述べた物質變化の極限に於て見る世界點の内面的整理を見るとき、既に承認さるべきことである。世界點は外延的世界の極限である點に於て、凡ての有量的世界を内容として内にもつ質的全體でなければならぬのであつて、凡ての物質變化の極限を質的契機として内面的に統一して居るはずである。この點に於てアインシュタインの世界點はその内面的整理に於て精神的である。化學

的方式によつて示さるべき一切の物質變化の極限にある物理的法則の世界として、凡てを質的契機に於て同時存在の一つの *Zusammenschluss* とするのがこの世界點の特色であるから、この世界點はその内面的整理の上ではその統一性の中に多様性を含む點に於いてライブニツツの知覺をもつものといはねばならぬ。⁽²⁾ 身體元素は精神的である。その凡ての物質變化が世界點に極限するといふことは、その凡ての變化を表象の形式によつて内に統一することではなければならぬのであつて、その中には凡ての有理數の根本系列の極限が無理數の内面的全體の體系に於て統一されて居るやうに、凡ての物質變化の因果系列がその極限に於て表象に内面的に統一されて居る。のみならず、この表象が相互關係をもつについては有理數の極限に於てある無理數の上にまた無理數がなければならぬやうに、表象の上に表象を内にもつ根本表象の如きものがなければならぬのであつて、この根本表象自體が現象學的に見て、勿論對象的側面ではあるが、外なるものゝ内面的統一表象であると共に、内なるものゝ志向的發展として直接的な生活その物の形相學的な身體をなすところに、吾々の本節に於ける問題の中心的關心があるのである。身體中の如何なる部分に於ても亦如何に微細なる形式に於ても直接精神生活の要素が身體の單一要素の間に介在

して生活の連続的發展の關係を作つて居るといふのがロツチエのミクロコスモスの身體論に於て見る意見であるが、精神が身體構素の間に介在してその生活作用の連続的發展の關係を作るについては、精神それ自身がこの構素を内に藏するものとしてこれを表象の形式に於て有して居らねばならぬのみならず、なほその内面に於て一つの根本表象に統一し、これを以て直接的生活のイデアの形相學的形態の如きものとなさねばならぬ。この形態の豫想となる自由こそ凡ての形態の根源となるものであるから、これを身體の根源といはねばならぬのであつて、私の今後の課題は正にこの自由の内面的整理に於て見る現象學的本質の純粹意識に身體の原型を見る點にあらねばならぬ。精神現象にも物理學的側定が行はれねばならぬといふのがフエヒネルの希望であり事業であるが、この豫想の自由は現象學的にこの事業を最も明晰に暗示するに足るべきものであつて、その志向性には物理的因果を内面的無理性に於て現象せる精神の構成的特質を最も明晰に窺ふに足るべきものがある。私はライブニッツが表象を以て實在の内面的關係と考へた知識を照らすに、ロツチエの叡知的空間に見る本質的内面的整理を以てし、更にこれを前にも論じたヘリゲルなどの原形式と原内容との根源的關係の道德的徹底の自由に迄進めて見るとき、

物の内面的構造が明かになると同時に、吾々自身の身體の構造も本質學的に明瞭となるものと考へる。以下これ等の問題を順序を追うて考へて見たい。

古いヴントなどの心理學に於て感覺要素の結合によつて成立せるものと考へられて居るところの表象には、無數の感覺の系列をその極限に於て内に統一するものとしての内面的整理がなければならぬ。心理學に於ても表象が感覺の統一體系であるといふについては、表象が只單なる感覺の集合であるといふよりも以上に、所謂創造的綜合の立場をもたねばならぬといふことを承認するが、この創造的綜合をもつについては、表象はその要素たる凡ての感覺を可能の形態で内面的に整理して居らねばならぬのであつて、表象の中には無數の感覺が外的事變の根本系列の極限要素として凡て内面的に統一されて居る筈である。點は線の終りではなく初めであつて、その中には無限系列の線が藏されて居らねばならぬやうに、表象は無限變化の系列の感覺を極限要素として内に藏して居らねばならぬのであつて、感覺が一つの獨立的認識であり得るのは、表象の内面的全體に映されたるものとして、それ自身一つの獨立なる認識の意味を自覺的に所有するからである。ヴントの『心理學綱要』に於ても見るやうに、感覺は精神分析の最後の客觀的要素には違ひないが、所謂固定

不變の原子的要素ではなく、常に變化して止まざる作用であるについては、これを内面的に結合する表象は凡ての變化的感覺の統一者としてその内面的整理に於ては無數の感覺系列をその極限要素に於て内に可能の形式で含有するものでなければならぬ。隨つて表象はその内に含まるべき凡ての感覺成立の契機を本質的現象學的に統一する高次の内面的具體的作用でなければならぬこと、恰も感覺が世界點の内面に於て凡ての物理的世界の契機を統一する高次の内面的具體的力でなければならぬと同一であつて、この内面的統一の可能の全體があるから、感覺はその合理化として識別作用の發達を要求されるのである。無理數が有理數の合理化的體系の發達を要求することは既に述べたが、感覺はその内在的全體の表象によつて客觀的認識の合理化的體系の發達を要求され、その識別的意味を深めるのである。

ザントなどの心理學に於て感覺は精神分析の要素ではあるが、それ自身獨立的要素ではなく、表象に統一せられて客觀的認識の獨立作用となり得ることを説くのも、もど感覺が表象に統一せられ、表象に於て一つの根本系列の精神作用の内面的全體の意味を得られるからでなければならぬのであつて、感覺はその内在的表象の限定的實現として、根本系列に於て自然の變化の合理的因果的系列の極限要素を表象の

内面に連続するものであるから、表象それ自身の自覺的限定的作用が反省的に深刻になればなるほど感覺の識別作用が明晰となり、表象の豊富なる内容の深刻なる統一が見られる。一口にいふならば表象の反省的自覺に於て感覺の内面的體系の建設が進歩するのである。

感覺が一定の獨立なる内容を有するのは現實意識の分析の方向を單に思想上無限に推し進めて、夫々の方向に極限として單純なる質的規定を規定せんとする分析的思惟の要求の產物たる假構に過ぎぬといふのが田邊博士の感覺の概念に對する意見である。⁵⁰ アインシュタインの世界の内面的整理に於て感覺を見るならば、私の前に述べた $X = \{j(x)\}$ は一般にこの内面的整理の世界を示すものとして、 x に於てある表象の内面的整理の非合理性では無限の感覺の變化をその内面に有するものではないならばならぬ。随つてそこには全體の統一の一つの直觀がなければならぬ筈である。凡ての感覺の根源としてこれを内面的に統一するところの心理學的表象は、かゝる全體として感覺の多様性構成作用 *in vielgestaltiger Akt* でなければならぬのであつて、所謂志向的體驗の内面的建設といふことは私は精神作用の特質として既にこゝに見られるものと思ふ。外から見て感覺の根本系列をその極限要素に於て内に

統一する表象の直觀的全體は、内から見ればこの極限要素を連續する内面的全體として、一々の極限要素に内在しながら無限にその識別作用の個別化的發達を要求すべき志向性でなければならぬのであつて、この志向的發達の意味として感覺は認識の對象を作るのであるから、感覺の内容及び認識の對象は要するに有限性に對する極限としての無限性のものである。所謂原子的固定的のものではない。一體吾々の意識では志向的對象は永久に新らしき對象となつて現はれ、同じ對象であつても常に異なれる賓辭をもち、異なれる規定的内容を有するものであるが、^(四)感覺が永久に新しきものとして現はれて來る志向性をもつのはその内面的に存在する全體表象の要求する合理化的體系化の必然の結果である。意識の内面的構造を明かにすべき現象學的立場から見るときは、その對象的側面にあるノエマでは如何に分析を進めてもなほ未知數であるべき x として所謂 *das Bestimmbare X im noematischen Sinn* なるものがあつて、凡ての認識に於て永久にその志向的對象の同一的中心的契機を作つて居る。世界點の内面に於てこれを可能の形式で内にもつ感覺も、その内面に於てある全體表象に比較するときには、なほ變化的賓辭であつて、表象は感覺の中心的契機として感覺に對していはゞ可能的賓辭の規定者の立場に立つものであり、隨つて

凡ての賓辭から抽象せる純粹の主觀であるとも考へられる。現象學に於て表象にも對象的側面で志向性を認めるのはこのことであつて、この志向性の内面では表象は凡ての感覺をその極限要素に於て内に映すものとして、その反省的自覺に於ては、感覺の非合理性に對して合理性を與へるから、感覺それ自身は非合理性であるに拘らず、その非合理性のまゝ合理性に包まれたる識別作用となることが出来るのである。この點に於て私はヘリゲルなどが形式と内容との關係に於てもつところの思想は最も注意さるべきものであると考へる。感覺がその所與に於て非合理性であるといふことは、その内面に於てある全體の表象がその純粹性に於て非合理性であるといふことではなければならぬが、この非合理性の全體の表象が感覺の非合理性の根源であるについては、本質的現象學から見るときは、表象それ自身が感覺を内にもつ點に於て、これに形式の意味を與へるものとして、その非合理性の内面に合理性をもつものでなければならぬ。即ち合理性に於てある非合理性として、表象それ自身が自覺的直覺又は創造の内面的建設を以て本質とするものでなければならぬ。

表象が物の形態を内にもつ同一的中心的契機であるといふことは、この自覺的直覺の内面的建設性に於ていふことである。アインシュタインの世界が世界形像と

して最も完全なるべきものであることは既に論じたが、この世界が世界形像として最も完全なる所以は、その内面的整理の非合理性に於て凡ての世界現象を内にもつ原像であるからであつて、そこには一切の時間空間上の物理現象を發生すべき働きを感覺として内に藏して居る。物理學者が世界形像の内面的整理に於て世界及びその連續を考へるが、これはその世界形像の要素を連續する感覺に於て可能のことであつて、感覺は世界形像の内面に於てその凡ての要素を連續する全體として、根源的物理現象をその内面的整理に於てもつて居らねばならぬ。感覺がこの整理を内面の全體的表象に映す點に於て、その現象學を有するか否かについては疑問もあるであらうが、私は感覺を以て以上の如く解せねばならぬと考へる立場から、アインシュタインの世界の内面的整理が純粹エネルギーの現象學を可能ならしめるやうに、感覺の現象學が可能でなければならぬと考へる。感覺が物理的變化の根本系列をその極限要素に於て内にもつものとしてそれ自身内面的全體の純粹表象に極限すること及びこの全體的表象の自覺性に於て感覺それ自身が無限の合理化的體系の内面的建設を要求されることはすでに述べた。例へば吾々は視覺の種類は三萬五千であるとか、又は一つの感覺の中にも五萬の種類感覺があるとかいふが、感覺の

合理的體系化の内面的無限性からいふときはその數は正に無限でなければならぬのであつて、感覺はかくその内面的全體性に於ては無限に識別作用の分化的發達を要求すると共に、それ自身本來物理的變化の極限にあるものとして精密科學の合理的體系の内面的整理を承認するものである。つまり無限に精密科學の合理的體系の内面的本質學的整理を要求する意味であるといふのが感覺の本質であるから、感覺の現象學は成立すべきものである。感覺が只與へられたる單純な多樣であるとするならば、設令それが知覺的表象の全體に統一せられ、更にそれが個別的直觀に於てある點に於て内面的連續と意味とを得るものとしたところが、感覺の現象學といはれる如きものが成立することは困難であるかも知れぬが、感覺は全體的表象の認識の意味であると同時に、純粹エネルギーの極限として何處迄も精密科學の内面的體系的整理を要求する點に於て現象學をもつべきものである。随つて感覺の特質はその本質的現象學に於ける形相に於て最も具體的に理解さるべきものであつて、感覺はこの形相に於て無限變化の物理的系列を内に統一すると共に、これをその背面に於てあるところの内面的全體の直觀に根源せしむる點に於て、凡ての世界現象の自覺的根源となり、これを以て全體の實現の過程とする。體內に於ける物質

の變化が常に全體の影響の下にその活動の方向及びエネルギーの分量を異にし、一口にいふならば力學的形態を異にするといふことは、この感覺の形相に於て一層明晰でなければならぬのであつて、身體はもと内面的全體の自覺的直觀に根源する感覺の形相である。アインシュタインの世界が體内に於けるエネルギーの根源としては既にいつた如く特殊の全體の構造をもたねばならぬが、これは感覺の内面的世界に映されてのことであつて、感覺の世界に於て初めて有機的といふ意味を生ずる。感覺が純粹エネルギーの變化系列の極限に於て内にもつと共に、表象の内在によつてこれを個別的直觀に根源せしむる點に於て、吾々の體内に於ける物質變化は根本系列の變化としてそれ自身一つの獨立の意味を有せる全體的变化となるのである。葡萄糖がエンチームの働きによつて一つの新組織に變はり、全體の維持性に於て體内に於ける物質變化の意味を得る場合に於ても、その個別的變化の獨立の意味に於て、内面的には必ず純粹表象に統一された感覺の統一がなければならぬのであつて、私はこゝに前に述べたロツチエの言葉の意味が一層現象學的に明瞭に理解されるものと考へる。

ロツチエのいふ如く體内に於ける元素の連續をなすものが精神であるといふこ

とは、元素の物理化學的構造からいふときは、その内面に於てある感覺に於て連續されるといふことである。

アインシュタインの世界點が凡ての世界線を内に統一せるものを感覺はその極限に於て又内面的に統一し、凡ての世界點をその極限要素に於て一つの全體の直觀の下に結合して居るのであつて、この全體の直觀に映されたる感覺の極限要素の相互關係が即ち感覺の形相として身體の物理的作用及形態を直接内面的に映せるものであるから、感覺の形相を見ることが身體の形態を見るに最も本質的なる事業でなければならぬ。内に全體の直觀をもつ感覺は本質的現象學の上では、その意識建設の志向性を以て正に身體建設の志向性となすものであつて、この志向性に於てある感覺の形相、即ち全體の直觀に映された感覺の非合理性が最も根源的なる本質的感覺として身體構成の根源を最もよく語るものでなければならぬ。ヘリゲルは現實的認識に於ける一切問題は、論理的構成的形式と、この形式の非論理的材料との關係に直面するが、形式によつて非論理的材料が作り變へられて論理的意義に變はるのではない。全く非論理的材料がそのまゝ理論的特質を與へられるのであつて、問題全體は全く形式の材料としての非論理的材料の經驗性を離れないといつて居る。^(六)

所與の非合理性の材料はその背面の全體性に於ては純粹なる非合理性でなければならぬが、この純粹非合理性は既に述べたる如く無限の合理的體系化の根源なる點に於て、それ自身本質的現象學から見るときは合理性の下に映されたる非合理性でなければならぬ。即ち全體の自覺に映されたる非合理性でなければならぬのであるが、この自覺に映されたる點に於て、感覺の非合理性は既に述べたる如く無限の志向的發展の根源であると同時に、特殊の意味をもつ本質的現象として合理的體系化によりながら一切の個別化的發展をなすべき根源となる。自覺に於てある感覺の非合理性は身體的個性の原型である。非合理性の内容のみでは感覺は何等の特殊性をも持てぬ、隨つて現實的經驗となれぬが、この非合理性の内容がその統一的連續に於て全體の直觀の合理性に於てあるものとして現實的經驗性を有するを得るのであつて、この現實的經驗性こそは感覺の自覺に於てある形相を最も明瞭に語るものであると共に、又身體の内面的建設の特質を最も明瞭に語るものでなければならぬ。私は前に數學の集合論を微分の内面に於て見る實函數に於て元素の内面的構造を見たが、感覺の形相はこの實函數の形相の内面に於てあるものとして一層具體的なる全體であつて、その内容が形式に置かれたる現實的個性の自覺的直觀に於て

見る感覺の本質には、凡ての身體作用の根源がある。この形相で一つの要素から他の要素へその相互關係の中心が移動するとき、感覺の本質的認識の變化があるのであつて、表象的認識の獨立的起原がこれであることは斷るまでもない。感覺の形相がこゝに新になると共に、身體の形態も獨立の創造を得ること勿論である。感覺の自覺的建設が身體の合理化的體系の建設である。

現象學では根源的所與の意識はそれ自身本質的意識であり、隨つて必然的に自發的であるけれども、感性的所與の經驗的意識は自發的でないといふが、これは注意を要するであらう。この意見にはなほその背面に認識模寫説の陰影が宿つて居る。

感性的所與もその經驗たる點に於て上にいつた内容が形式に於て現實的個性となる自覺的直觀ではその本質上それ自身自發的なるものでなければならぬのであつて、個々の對象が現象するについては、感覺の形相學ともいはるべき内面的整理の現象學の本質に於て、自發的にその對象性の内面的統一を外面的多様性に發表する自發的建設のあることを要する。感覺をその内面に向つて無限に打ち延ばした極限では、凡てを自覺的統一に於て内にもつと共に、感覺その物の非合理性を自覺的發展の根源的生活のイデアとして特殊的方向の志向的發達とするのが本來であつて、生

活の根源では感覺的發展を以て一つのイデヤの定立とするところの自發的發展がなければならぬ。吾々の意識するところではないけれども、體内に於ける物質の變化は物質それ自身にはその内面的本質から生ずる自發的自己實現の過程でなければならぬのであつて、感覺作用の極限要素を内にもつ表象の構造の内面では直覺的所與の本質的現實性に於て個別的に一切の物質變化の原型をもつて居らねばならぬのである。この意味に於て身體構成の根源は、若し現象學の言葉を以ていふならば *innere Moment der Noesis* にあるものと見られるのであつて、この主觀の志向性の内面的契機はフッサールもいへる如く最も廣義のヌースの特殊性をなすものであるから、結局身體はその生活形式において認識的體驗は勿論のこと志向的體驗にまで溯り、生活のイデヤの形相學的豫想に究極せねばならぬに至り、この豫想としての自由の働きに於て身體の構成を考へねばならぬに至る。志向的體驗の内容を構成し、志向性の特殊性を生ずるものは、意識にその特殊的意味を與へるものと同一であるといふのが現象學の主張であるが、この意識に特殊の意味を與へるものが即ち身體を特殊の形態に構成するものでなければならぬ。一つの感覺も現象學的に内に向つて無限に引き延ばすときは、純粹表象としての主觀の極限に於てこれをも一つの

特殊性とする精神に達せねばならぬが、外に向つて無限に延長するときには純粹エネルギーに於て自然界に連續する。

感覺はこの兩極限の中間に於て、これを結合するものとして、それ自身ライブニツツが表象内容の無限の相違を言ひ表はすに用ひた無限に多様な觀點の總體の內面的整理の系列にも等しきものとして、外面から見れば現實的自然の極微量を有すると共に、内面から見れば表象自體の內面的體系の中にその極限要素を有するものとしてその反省的直覺に映されて居る。この點に於て田邊博士が『直觀知と物自體』中に於て論せられて居る叡知的直觀が最もよく感覺の性質を語るものでなければならぬと考へる。この感覺の內面的形相に身體原型を有する吾々の身體はその構成の本質に於て自覺自展であること勿論である。感覺をその内面に向つて無限に打ち延ばしたとき、その極限に於て見るノエジスをすら一つの特殊的方向の働きと見る精神、かゝる精神は形式をすら一つの内容と見る形式の場所に於て創造を内容とする純粹なる自覺的自由でなければならぬことは私の既に述べたところであるが、感覺はこの自由の道德的徹底に於てそれ自身徹底的意味の當爲となり生活となる點に於て、同時に形相學的に身體的現實性に於て一切の身體現象の根源を

もつのである。この點に於て身體は感覺が外面的なるものを内面的なるものに映せる形相にその原型を有すといふべく、自由が一切をその極限要素のイデヤに於て映せるものであるといへる。私は前に體內に於ける物質變化について考へたる際、植物性神經がこの變化を支配するならば、それ自身自由に於てあるものとしてその直接的對象に映されたる身體はかゝるイデヤでなければならぬ點について述べたが、自由に於てある身體の原型は全くこのイデヤとして *die Formbedeutung der Absoluten-Freiheit* であるといふことが出来るであらう。純粹なる當爲實在が本質的身體である。

一八

併し身體の根源たる感覺を論じてこゝに到るときは、私はなほ進んで考へねばならぬものがある。感覺は凡ての世界點をその極限要素に於て内に統一すると共に、これを一つの全體の直觀の下に映せるものであることは既に述べたる通りであつて、この直觀に映す點に於て感覺それ自身が無限延長の世界線上の一切の點をそれぞれ獨立の意味の個性とするのみでなく、なほこの個性を一つの連續的體系に結合するのであるが、この個性の結合に於ては、既に述べたヌースに對してなほ深き觀察

を要する。無限延長の世界線上の一切の點を獨立的個性となすについては、このス
ースは凡ての點に於ける個性に獨立の起原を與へるために、それ自身西田博士のい
はれて居る無の場所でなければならぬのみでなく、自らこの起原を作るべき力を積
極的に内藏するものでなければならぬから、結局この絶對的自由の形式の意義とも
いはるべきものは、無の場所のもつ積極的意義として、凡ての客觀性を超越せる主觀
性のもつべき意義であり、ヘリゲルの原材料の要求する原形式においてある意義の
如きものでなければならぬのである。こゝに於て感覺の形相に身體の形態を見た
私の觀察はこの感覺の現象學的本質の分析に於て更に一步を進めねばならぬ譯で
あつて、問題は直觀前の材料には入るが、一體直觀に於ては既に述べたる如く現象學
的時間の流れに於てそれ自身で完結せる全體の直觀を更に同時性の觀點の下に統
一せるものがなければならぬ。即ちいはゞ現象學的時間の豫料の多を同じく現象
學的空間に統一せる全體の同時的なる直觀がなければならぬことは既に述べたが、
かゝる直觀が神の叡知的直觀として吾々人間のもつ個別的直觀を内にもつ直觀で
あるべきことは斷るまでもないところであつて、この神の全體の同時的直觀に於て
凡ての個別的直觀が内面的に統一せられ、隨つて個別的根本系列の表象がその極限

要素に於て内面的に一つの全體的同時的なる根本表象に結合せられる。この統一表象の原始的形態こそ私は本質的現象上凡ての存在の中の最も根本的なるものとして考へる直覺的所與性の様相でなければならぬと考へる。その中には凡ての客觀的狀態が根本系列の極限に於て直接最も明晰なる形相に於て照らされて居る。

この反省的自覺の形相が身體的現實性の最も根源的なるものでなければならぬことは私の既に前回の論文で論じたるどころであつて、身體が全體的構造であるといふことはかゝる形相に映されたものとして一層その意味が徹底する。感覺の形相が身體の根源であるといふ點に於て、身體は具體的全體であつて、物質變化の原型たるアインシュタインの世界點がこゝにその構造を有機的に變化すべきことは既に述べたがこの感覺の形相もなほ徹底的のものではない、その内面に於てある一層純粹なる表象の形像とも見らるべき根本表象の内面的整理の自覺に映されたるときに遙かに徹底するのであつて、この自覺の形像とも見らるべき本質的現象の直覺的所與性の様相に於て身體を見るとき、吾々は殆ど徹底に近い身體の原型及びその發生を見ることが出来る。身體作用は内に向つて無限に打ち延ばされてこの様相に映され、その規定を得たとき、フツサールの純粹我ともいはるべきものゝ形相とな

ることが出来るのである。

こゝに於てか吾々は初めて人の身體を見ることが出来るとも考へられる。併しよく考へるときは、これにはまだ假定がある。この様相も直觀の様相である以上は、まだ眞の主觀性の様相ではなく、随つて眞の生命ある身體の原型ではない。哲學上原型といはれる以上は既に述べた如く直觀ではなく、直觀前のまだ何等の内容もない無内容の内容ともいはるべき原材料が原形式に於てある意味としての純粹なる根源的現象性に於て考へられねばならぬ筈であつて、こゝに初めて身體がその現象性の絶對的根源に於て、その内面的整理の無理性を合理的體系に發展すべき無限の力を有せる獨立者であることを知る。身體性の根源は、フツサールの直覺的所與性の様相でなく、この様相の背面に於てこれを内にもつ無限なる可能の世界に連續して、この様相の全體をすら一つの形式の意味とする根源的無の世界でなければならぬ。身體が一切の極限を越えてこの無の世界に映されるとき、吾々は初めて無假定の身體の原型を見るのであつて、アウグスティヌスの神の世界がこれでなければならぬことは、私の既に述べた所である。これが私が既に述べたる如く直觀前の原材料と原形式との根源的關係の問題を前回の論文で本質的現象學の最も重要な問

題として提出した所以であつて、身體の根源には形なきものから形を生ずる根源的現象性のあるを要する。もし現象學上意識の内面的構造を論じて、その直覺の様相の内面的整理を考へるならば、この整理以前のまだ何等の内容にも分離せず、隨つて無形態の材料ともいはるべきものとしての原材料が原形式の中に置かれたる原形式の意味 *Uniform-bedeutung* ともいはるべきものゝ中に凡ての現象學的本質的整理を發展すべき根源的個性がなければならぬのであつて、直觀の全體的同时的創造がそのまゝその非合理性に於て合理性をもち得るのは、直觀前の本質的現象學的整理に於て、この原形式の意味として絶對的現象性であるからである。フッサールの如く根源的所與性の直觀が認識の權利根據として凡ての原理中の原理であり得るのは、⁽¹⁰⁾直觀その物がその直觀前の純粹なる絶對的現象性に於て論理性をもつからでなければならぬのでないか。此純粹現象性に於て形相のないところに形相を映せる原形式の意味が凡ての合理的體系化の根源たる自覺の非合理性であり、物の根源たる絶對的形相である點に於て認識の權利根據はこの所與を超越してこれを内にもつものでなければならぬでないか。この所與以上の純粹現象性に經驗の根源たる物自體が實在する點に於て、それ自身構成の根源をもつ身體は本來この物自體に根源

するものでなければならぬであらう。身體が絶對自覺の意志においてあるイデアその物であるといふのは、このことではなければならぬのであつて、こゝに初めて身體はそれ自身生命のある絶對個性であるといへる。

この點に於て身體の根源はフツサルなどの意識の根源に於て見る身體の根源よりも深き立場にある。氏は前述の如く根源的所與性の様相に身體性の根源の現實性を求めて居るけれども、これでは與へられた身體は見られるが、主觀性の根源から作られる生命ある身體は見られぬ。この身體は所與に根源するのではなく、この所與を内にもつ原形式の意味に根源するのであつて、この意味としての原材料即ち原形式に含まれたる原材料に於て吾々が形なきものから形を生じ、意味なきものから意味を生ずる絶對的根源の個性を見る所に身體の根源がある。この點に於いて私は意識と物體性との融合せる全體である精神物理的統一、全世界の現實的統一として「生物」といはれるものは、この原形式の意味に於て、⁽¹⁾なければ見ること能はざるところであると思唯する。吾々はこの形式の意味に於て初めて徹底的意味で内容に徹底せる形式が物自體としての絶對的個性を作り、根源的生活に於て内容が形式に役立つのみでなく、それ自身直接その特殊的個性を作るを見るのである。生活を

理性的規定的價值實現の形態の多様性に發展せしむるものは、全くこの原形式に於てある原材料である。

私はこの意味に於て、カント哲學の道德的徹底の物自體の文化哲學的價值を認めたいと思ふ。詳細は後に物の意識から客觀性を徹底して主觀性を見る際に譲るが、私はカント哲學に於て最も苦心せる跡は、その先驗統覺の必然的統一性の根本原理たる悟性に對して、意識の獨立性の體面から多様の直觀性を承認せざるを得なかつた現象學的理由に於いて見られると考へる。⁽¹¹⁾ 勿論カント自身は現象學的理由なる言葉を使つたのではないが、悟性が先驗統覺において感性の所與の多様を統一するならば、既にもいつた如くその統一前の純粹統覺性に於て一切の可能的所與の多様性を藏して居らねばならぬのであつて、これがカント哲學に於て純粹意識に於ては叡知的悟性に直觀性を承認すると同時に、その叡知的直觀の優越的先驗に於て創造の自由を承認した所以であらねばならぬ。所が批判哲學からいふときは、この叡知的悟性の多様性はその悟性の體面からいつて純粹論理の構成的形式を容れるものとして、本來この形式に於てあるべきものであるといふことは多言する迄もないところであるから、カントの哲學では更にこの自由を絶對自覺の意志優位説に進めて

その根源的現象性に於て物自體を立せねばならぬ必然がある。私はこの物自體が直觀ではなく、直觀前に於てまだ何等の内容にも分離せぬ無形態の原材料を内にもつ原形式として絶對自由の個性に於て承認さるべき點に注意するに至れる今日の所謂前現象學には多大の興味をもつと共に、これがカント哲學の當然の歸結であると考へる。カント哲學の直觀もその本質的現象學ではなほその背面において一切の可能の無限に連續せねばならぬと共に、その内容はこの可能の世界ではまだ何等の形態をも持たね原材料でなければならぬが、この原材料が純粹意識の現象學前の整理では原形式に於てある故に、その根源的關係に於て一切の個別的存在の根源として絶對的個性をもつことが出来る。即ち純粹現象性をもつことが出来る。カント哲學が直觀を對象化する點に使命を有するといふことは、この純粹現象性に溯源すべき使命を帯びることではなければならぬのであつて、カントが自然の實質的合目的性に於て人格目的説を擁立せんとしたことは、全くこの根源的現象性の物自體に溯源してのことである。この物自體の獨自性に於て吾々は凡ての變化をその根本系列の最高極限に於て内に映せる絶對自由の意志の生活その物を最も具體的に見随つて身體その物を最も具體的に見ることが出来るのである。

オストワルドの色も無限連続の極限では感覺の純粹なる作用となり、この作用は又その無限なる連続の極限では自由の人格となるのであつて、その絶對自覺の個性の中には一切の發展の充足理由を備へて居る。絶對自由の創造が合理的法則に於て具體的現象的身體を建設すべき十分の理由を備へて居る。ヘリゲルは原材料が原形式に於てある故にその根源的身體性を失はぬのみでなく、この形式によつて凡ての方向に向つて意味の充實せる生活を構成するといつて居るが、^(二二)絶對自覺の自由意志では凡ての身體構成作用の根本系列の極限に於てこれを内に創造して、これに全人格的意義を與へるのであつて、材料の全體的同时的創造がその内面的必然によつて合理的體系の身體を構成するのは全く自覺の自由に於てある。身體はフイヒテが我の自覺に於て主觀と客觀との根源を求めた我に根源するものでなければならぬのであつて、氏の自由の自覺に於て見る我こそは現象學でいふ直覺的所與性の様相以上に身體の根源を語るに足るべきものである。絶對自由が自覺に於て自己自身を直覺するところに凡ての身體性の根源があるのであつて、自覺に於て見る Form-bedeutung が最もよく身體の根源と特質とを語るに足るものである。原材料がその極限に於て絶對自覺に映されるから、それ自身では何等の形態もない原材料

としての材料が特殊の意味をもち、物の變化の最後の極限に於て生活の全體的規定を受けて身體の原型を作り、既にも述べたるごとく直接的なる生活のイデアとしてその内面的連續の發展となることが出来るのである。私は前に述べたドリイシエの個別的方向の全體的徹底の生物學的原理なども、若し哲學的に根據を與へんとするならば、氏自身がフツサールの哲學を採つたよりも以上になほ切り込んで考へ、カントの自覺的意志に於て見るこの「形式の意味」に徹底せねばならぬと思ふ。イデアの特殊性に於て意識の特殊性を構成され、前に述べたところの言葉でいふならば、即ち材料を志向的體驗に構成する點に於て身體の特殊性を見るのであつて、その純粹個性の中には凡ての物の變化系列を最も根本的起原に於て最も具體的價値の身體に構成すべき十分の理由がある。

若し現象學が純粹意識の直覺の根源に溯つてその本來的に存在せるものを明かにすることフツサールの考へて居る如くであるとするならば、この本質的なるものは根源的所與ではなく、この所與の内面に於てこれを一つの意味とする絶對自覺の自由でなければならぬのであつて、所與はこの自由の志向的對象たる點に於て初めて眞の意味で意識の本質的内容たるを得るのであると共に、その内容は直接身體構

成の材料となつて居らねばならぬのである。

内容が生活その物をその理性的規定的價值實現の形態の多様性に發展し、一口にいふならば多方面に價值生活を實現するといふことは、全くこの自由によつて積極的に徹底せられた、自由の直接的對象たる身體自體に於て初めて具體的に見られることである。勿論この點を哲學上明かにするには既に斷つてある如く、私は以上述べて來た物の客觀性を徹底して主觀性に出で、その背面の自由を見ねばならぬ。随つて今はまだ眞の哲學の立場に達して居らぬが、姑らく以上述べて未だ立場で見ても、原形式と原材料との關係では、内容の多様性發展は主觀性の統一性内面性を保護し深刻にするのみであつて、この生活の根柢では凡て外なるものが内なるものに統一せられ、主觀が眞の意味に於て世界の中心となつて居るといへる。^(四五)私は前に身體は宇宙の物理的體系の中にありながら意志の直接的對象として常に獨立の存在をなす點について述べたが、この意志の自覺では自體それ自身が道徳的徹底に於て、世界の中心的立場にある固有の體系を構成して居るのであつて、自由の原形像では身體は原材料の單純なる可能から轉じて現實的具體的に意味の最も充實せる生活を實現すべき充足理由である。假にカント哲學の人格目的説をこゝで考へて見たい。

カント自身はこの原形式に於てある原材料の根源的個性について論ずるところはないけれども、意志優位説の道德的徹底は必ずこゝに達せねばならぬのであつて、この根源的個性に於て初めて意識の絶對自由の志向的建設が身體の志向的建設として、いはゞ靈肉一致の全體的人格の實現を見るのである。上にあつては星辰内にあつては道德律といつて、カントはこの二つのものに對して常に新たな驚嘆と畏敬の念を捧げたが、道德徹底の意識ではこの二つのは合一せる一人格であつて、そこには定言命令が直ちに身體構成の原理となつて居る。全く文字通りに *Menschenbildung* であつて、自覺的自由としての人格が最も明晰なる全體的价值實現の志向的活動に於て身體生活を徹底的に構成して居る。私の既に述べた體内に於ける物質の變化では一片鱗の中にもライブニッツのアダムに於て見る個性を見るといふことはこゝで徹底的に見られる。

自然界に於ける人間が物質の價值を本來的に承認するとか、又はこれを尊重し大切にするとかいふことは、この靈肉一致の「人間陶冶」の立場に於て初めて可能のことであつて、この道德的徹底の立場に於て、吾々は初めて物自體としての身體をもち、自ら宇宙の中心に立つて凡ての物を正當に取り扱ふことが出来るのである。一體私が

この小論文を起稿する際にあたつて最も痛切に感じて居つた點は、自然科學の學理に關する疑義から起こる教育上の疑問にあつた。私の高等工業學校などの研究では科學の無上律といへばすぐエネルギーの保存律を考へるのであつて、凡ての科學研究はこの律以上に出で、居らぬが、實際の生活及び教育では攝取するカロリーと知力とが並行して居らぬやうに、必ずしもこの保存律を破るのではないが、一片の覺悟から出る生活の創作にその本領と眞面目とを有して居ることは注意すべきである。こゝに於て私は教育の必要上、一體このエネルギーの保存律なるものは如何なるものであるか、科學的事實としては吾々は何處迄もこの保存律に準據せねばならぬが、これに準據しつゝ生活及び教育の創作を許容すべき可能性は何處から得られるかといふことを深く疑問とせざるを得ざるにいたり、朝夕生徒に接すること、この疑問が次第に強く私の念頭を刺戟するに至つた。私のこの論文の研究はこゝに起源するのであるが、起稿の當時私は極く大體の見込は付けて居つたけれども、また科學的にこれを主張するまでに明晰なる概念を得るに到らなかつた。随つて私は別の方面から研究の目的を述べて、不完全ながら以來自分の研究を發表して學者の批判を仰いで來た次第であるが、私のこの點に於ける卑見は既に讀者の知らるゝ如

$x = f(x)$ なる簡單なる函數方程式に纏められて居る。コーエンの dx に於て見る x としての自由の内面的整理が各瞬間毎に異り、フツサールの對象的意味を規定する x がその創作性に於て異なるから、この方程式からいへば係數が異り、函數系列に無限の差異を生ずるといふのが私の前に述べた意見であつて、エネルギーが不滅であるといふことは、要するにこの x の内面的整理が無理性であり、非合理性であるに由る點に於て、私は前提の疑問に對して一部分の解決を得た次第である。併しこの非合理性の内面的整理が何故に合理性の概念的體系化の徹底を要求する根源となり得るかといふことについては、當時まだ解決を得て居らぬ、疑問は依然として存在する譯であつたが、その後の現象學的研究によるときは、非合理性が合理性の概念化の根源を無限にそれ自身の中に有し、それ自身無限の合理的概念化を要求するのは、この非合理性がその内面的整理に於て合理性を内にもつ自覺的自由であるからであつて、その純粹なる根源的現象性に於て見る物自體では、物は凡ての方向に向つて凡ての個物を作るべき充足理由をもつものである。科學にいふエネルギー保存律又は不滅律といふことはこの充足理由の外面的系列をいふに外ならぬ。前に述べた $x = f(x)$ といふならば y の既成系列の範圍内にいふに過ぎぬのであつて、物の本體は

このγ系列の規定的要素としてのαにある。物の本體たるαの絶對自由ではエネルギーのない所からエネルギーを生じ、形態のないところから形態を生ずるの神祕がある。人はその自覺的自由に於てこの神祕に立つとき、初めて既にもいつた如く世界の中心に立つて生活の領域の意義及び地位を明かにしつゝ、物を取り扱ふべき目的及び方法を知るを得れば、エネルギー保存律を自然科學の無上律として徹底的に要求すべき權利をも所有することが出来るのである。

物の問題は所詮人格を中心とした道德的徹底の自覺的自由に於て活きたる生活の領域には入つて取り扱はるべきものであつて、この自由に於て吾々は初めて物の理解を得られ、エネルギー不滅の根源並びにこの不滅のエネルギーが永久に合理化的體系の因果系列を要求すべき科學の最も嚴密なる法則を内含すべきを知るのである。勿論この自由はフツサールの現象學でいふならば、對象的側面に於て見らるべき自由であり、既に述べた *das Bestimmbare X im noematischen Sinn* であるから、これを主觀的側面に於ける吾々自身の意識に於てある自由と混同すべくもない。随つて勿論なほ眞の意味の生活及び教育の原理となるべきものでないことは斷るまでもないところであつて、只生物學的原理となるのみであるが、この範圍でいふならば、物の

内面に於て見る自覺的自由の立場で定立する生活のイデヤは一つの道德的徹底の立場であるといへると同時に、身體の原型の根源でなければならぬ點に於て、生物哲學の根本原理は自由でなければならぬ。對象的側面ではあるがカントの *Kategorischer Imperativ* に生活體の根源的構成があるといふことは注意すべきことである。現象學的演繹によれば超越的意識の領域は特定の意味の中に内在する絶對的實在の領域である。この領域が實在の根源的範疇であつて、凡ての實在がこの領域から生じ、凡てその本質をこの領域から得て居るといふのがフッサールの意見であつて、氏は範疇論は一切の實在の區別を超越せるこの根源的範疇から出發すべきものであると論じて居るが、この根源的範疇から演繹さるべき範疇は凡て生活の範疇であつて、その領域は自覺的意志が根本系列に於て生活の個別的發生をなすべき場所である。そこでは凡ての存在が生活の領域に入り、身體となつて居る。即ち外なるものが凡て内なるものに統一せられた絶對生活として、自由のイデヤが凡ての身體の原型となり、それから凡ての變化系列の身體を發生すべき根源的範疇の身體となつて居る。この點に於てカント哲學はその現象學的根源に於て最も徹底せる意味に於て生物哲學の根本原理を示すものといへるであらう。勿論カント自身はその批判

哲學からこの點について考へて居つたのではない。その哲學は生物哲學の原理には最も根據の深いものであるに拘らず、當時の生物學の知識の幼稚であつたのと、又カント自身も公平に見てその思索を積まなかつたのとで不徹底なものとなつて居る。マックス・ハルトマンはカントの有機體論を以て多義的な矛盾に滿てるものであると評して居るが^{カント}カント哲學にはこれは今日の生物哲學から見れば止むを得ぬ批評であらう。私はこのハルトマンの生物哲學には凡ての點に於て同意するものではない。氏がニコライ・ハルトマンの『認識の形而上學』の非合理性などから採り來つた生物哲學の根本原理にはなほ不滿を抱くものであるが、以上のカントの生物哲學に對する批評には同意せねばならぬものがあると思ふ。勿論カントがその批判哲學の立場から生物學的認識では目的を以て發見嚮導的統整的原理として居ることとは斷るまでもないところであるが、カントの生物體の内面的合目的性に於ける目的觀念の主張はこの統整原理に止まることなく、實質的合目的性の主張に於て有機體では目的がその存在可能の根據を含まねばならぬといふ點にその眞意をもつて居ることは言ふ迄もいどころである。^{カント}この點は田邊博士が『カントの目的論』に於て精細に論述せられて居るところであつて、私は一言のこれに加ふべきものあるを

知らぬ。しかしながら目的が生活の維持に影響してその構成作用を徹底する點については、私は遺憾ながらカントの目的論はその第二批判に於て見る道徳的徹底の立場から見ればなほ不徹底であると思ふ。カントの哲學では客觀性の徹底に於て見る主觀性の自由が最も純粹なる方法によつて物の内面においてこれを生活體に構成する絶對的力であるべきことを十分に徹底せねばならぬが、私は寡聞にしてカント哲學がそのコペルシクスの廻轉の中心に於て、見るところの絶對自由の立場からこれを論じて居ることも見ねば、又その物自體の根本現象性に於て見る生活體の構成について少しもその先驗演繹の立場から論じて居ることも見ぬのみならず、カントはこの演繹の不可能なることをさへ言明して居る。^{七二}併しこれは問題であるではないか。私は既に述べた自由及び物自體に於て見る根源的現象性ではこの演繹は可能であると考へる。アインシュタインの世界形像を内にもつ感覺の形相學をその内面に於て無限に延長して絶對自由の形相として見らるべき物自體の内面的構造では、この演繹は可能であると考へる。勿論私のこれ迄述べて來た自由及び物自體は只對象的側面でのみ考へられたるものであるに過ぎぬから、只その門口に臨めるものに過ぎぬのであつて、まだ正式にイデヤの先驗演繹を論すべき權利をもつ

て居らぬといはねばならぬ次第である。随つて正式の議論は次回に譲る外ないが、以上述べて來たゞけでも、私は感覺の本質的現象學の可能がある以上、イデヤの先驗演繹の可能はあるものと考へ、物自體に於て見る原材料と原形式との内面的關係の原理では、イデヤは自由の直接的演繹に於て見らるべき形態であると考へられると思ふ。一般に私はカントのイデヤの先驗演繹論の不可能には疑問をもつものであり、何かの新しき解法があるでないかと考へて居る。本質的現象學の絶對自由のイデヤの形相が身體的現實性の根源であつて、その絶對的構成力では自由の志向性のまゝに身體が構成され、物自體に於て見るべき内面的體系の構成がそのまゝ身體の體系的構成でなければならぬ。絶對自由の定言命令で見る根源的生活の原形態では自由が世界の本質的中心として人格目的の實在である。良匠はその能を隠くすから言はないのであらうが、カントが上にある星辰と内にある道德律とを讚嘆したときに體驗して居つたと考へられる自由では、只自然の秩序の整然たること及び道德律の嚴肅なることを別々に見たのではない。所與をも内にもつ形式の徹底に於て所與その物を直接道德的生活の意味となす定言命令の志向的内面的建設に於て、この二つのものを結合せる世界の道德的中心から、生活の意味及び地位を體驗せる

自らなる君子の立言でなければならぬのであつて、私はこの語の體驗の中には、自由のイデアの形相學が身體の形相學たるの徹底味があると思ふのである。

勿論カント自身は嚴格なる意味でこの現象學的本質の内面的整理の身體を見て居るのではない。實はフツサルなどもいつて居る如くカントはその純粹理性批判の第一版に見る先驗演繹論では既に現象學的立場に達して居つたのであるが、カント自身は却つてこれを以て心理學的立場であるとして再び棄て、終つた位であるが、カント哲學その物が本來現象學であるといふことは勿論出來ぬけれども既に述べたところでも想像される如く明にこの傾向を見るのであつて、カントが現象學的考察によつて自覺的自由の意志優位説にまで進んだことは掩ふべからざる事實である。自由の定言命令に於て見る生活のイデアの形相には身體的現實性の最も根源的なる現象學的本質のあること、フツサルなどの考察よりも徹底せるは私の既に論じたところである。身體なきところに凡ての意味で獨立の根源的身體を作り、一切の發達力をその中に置くのが自覺的自由の特徴であつて、そこには何處迄も根源的獨立の身體を構成し、これによつて自由を現實的に實現する力があるのである。この命令によつて定立せられるイデアの形相には最も具體的なる身體がある。身

體はこのイデヤに於て徹底せる個性を有し、自由がその志向性によつて意識の特質を建設する所に、自己の個體を作るのであつて、意識に於ての如く身體は自由の統一性内面性をその身體的形相の多様性、發表性によつて害せざるのみでなく、却つて唯一の自由發展の方法としてこれを保護し深くするのみである。經驗的現實は有意義に徹底せねばならぬが、これを徹底するについては、この現實の統一の根柢に於て常に新しき形相を創造せねばならぬのであつて、自由はこの創造に於て身體に無限の深さと廣さを與へ、凡ての外なるものを内なるものに引き入れたる世界全體の絶對的中心としてもつべき生活の本來的意味を、その身體の絶對的個性に於て實現せしむる。こゝに於てか、私は愈進んで以上斷つた客觀性に徹せる主觀性の自由に於て見る身體の構成を本來の意味の哲學で考へねばならぬ譯である。(續く)

(一) Leibniz-Monadology, § 14

(二) Lotze-Mikrokosmos, I, s. 152

(三) 田邊元博士——感覺の概念について(心理學研究、第二卷第三輯、四八頁)

(四) Husserl-Ideen, I, s. 271

(五) Vgl. ♪ ♪ s. 212

(六) Herrigel Urstoff und Urform, s. 45-46

- (七) Vgl. Husserl-Op. cit., s. 43
- (八) „ „ s. 174
- (九) „ „ „
- (10) „ „ s. 43
- (11) Vgl. „ „ s. 70
- (11) Vgl. Kant-Kritik d. r. Vernunft. (von Vorländer) s. 153
- (12) Herrigel-Op. cit., s. 158
- (13) „ „ s. 306
- (14) Vgl. „ „ s. 103
- (15) Husserl-Op. cit., s. 141
- (16) Max Hartmann-Biologie und Philosophie s. 39
- (17) Kant-Kritik d. Urteilskraft, (von Vorländer) s. 236, 265, etc.
- (18) Kant-Kritik d. r. Vernunft, (??) s. 563
- (19) Husserl-Op. cit., s. 119